

困難な時代をリードする大局観を持った人材の育成を*

—慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科の取り組み—

前野 隆司¹⁾

Educating People Having Global View for Leading Difficult Era*

—Trial of the Graduate School of System Design and Management—

Takashi Maeno¹⁾

1. はじめに

現代は、様々な意味で不確実の時代と言われる。ざっと列挙してみただけでも、以下のように多様な問題が複合的に生じている。

- ① 科学技術の進展と世界経済の拡大がもたらした環境破壊、水不足、資源不足などのグローバルイシューの不可避化
- ② これも科学技術の進展と世界経済の拡大がもたらした、先進工業化国（注1）と発展途上国の格差拡大の問題
- ③ 日本においては、少子高齢化、デフレ、学力低下、犯罪の増加、国際競争力の低下、政治の混迷化、財政赤字の定常化、安保条約の将来の不透明化、近隣国との領土紛争の顕在化などの問題の山積
- ④ 国際政治面では、国力バランスの変化に伴う国際セキュリティの不安定化、テロ、国際紛争、核開発などの不透明性

（注1）日本ではいつの日からか「先進工業化国（Industrialized Countries）」を「先進国」と呼ぶようになったが、私は、優越主義的なおいを感じる「先進国」という呼び方をよしとしない。「工業化が進んだ」ことは上述のグローバルイシューをもたらした元凶でもあり、もはや「先進」というポジティブな響きの単語で語りえないことが明白だからである。

（注2）「普遍主義の不可能性と不可避性」は宮台真司の「日本の難点」（幻冬舎新書、2009年）での言葉である。上に列挙した問題には普遍的・絶対的な正解は存在しないことが明らかであると自覚しつつ、なおかつ、それらの問題の解決を目指さざるを得ない現代という時代をよくあらわしている。これは宮台が言い始めたことというよりも、ポストモダンの基本的な考え方であるというべきであろう。ポストモダンとは、「普遍的・絶対的な答えがあると信じた近代」の後の時代、という意味である。

* 2010年11月26日受理

1) 慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授

- ⑤ これらを哲学的・社会的な文脈から見ると「普遍主義の不可能性と不可避性」⁽¹⁾（注2）という矛盾の時代であること
- ⑥ 必ずしもネガティブな点ではないが、トップダウンの統治と逆方向の動き——ネットワーク化社会におけるボトムアップのつながりの連鎖が社会を形成する動き（スモールワールド現象、ロングテール現象、NPO・NGOの活発化、インターネット社会の隆盛、サブカルチャーの隆盛、文化の多様化……）——の活発化とそれに伴う未来予測の困難性

つまり、現代とは、「人間が何を行っても包み込んで許してくれるほど地球は十分に大きい」という幻想が成り立ちえなくなったフロンティア不在の時代であり、「戦後のパワーバランスに従っていれば日本は安泰」という依存的立場が成り立ちえなくなった追従不可能の時代である。グローバル化とネットワーク化に基づく急速な社会変革が進展する時代でもある。

このような時代の人材はいかにあるべきであろうか。それは、「木を見て森も見ろ」人材——日本が得意としてきた詳細設計力と、日本が苦手としてきた全体設計力を併せ持つ人材——であろう。後者の全体設計力は、最初に述べたような様々な根本問題を多面的に俯瞰し解決するために重要である。慶應義塾大学では、創立150周年の節目に、このような総合的人材の育成を行うために大学院システムデザイン・マネジメント研究科を設立した。本稿では、本大学院を例に、これからの時代を切り拓く人材育成のあり方についての試論を述べる。

2. T型人間から▽（ナブラ）型人間へ

従来、専門性の高いスペシャリスト的な特徴と、分野横断的な価値を理解したスペシャリスト的な特徴を併せ持つ人材は、T型人間と呼ばれてきた。T型人間は、上述の問題を解決できる人材であろうか。拙著⁽²⁾で述べたように、私は、これからの人材は▽型人間であるべきだと考えている。以下、

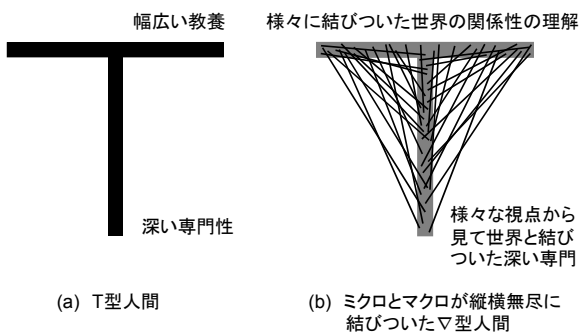


Fig. 1 T型人間と▽型人間

拙著の記述を参照して、T型人間と▽型人間の違いについて述べたい。

T型人間とは、Tの縦の棒のように、何かひとつの専門について狭く深く知るとともに、横の棒のように世の中一般の常識を広く浅く身に付けよ、という意味である (Fig. 1)。縦棒がスペシャリスト的な側面、横棒がジェネラリスト的な側面である。T型人間の問題点は、縦棒と横棒を、か弱い「点」でしかつながっていない二つの要素と捉えることではないだろうか。T字型の部品があったとしたら、継ぎ目のところが最も折れやすいことが知られている。応力集中という。

これは、たとえば、材料科学の研究者が、自分の専門である (たとえば) 炭素材料と、世の中の問題は、「専門的成果をいかに実用につなげるか」という点でつながっている、と認識していて、それ以外のつながりは全く眼中にないような状態である。こういう、視野の狭い——しかし、自分では広いと思っている——研究者はよくいる。これがT型人間である。

これに対し、これからは▽型人間を目指すべきではないだろうか。▽はヘブライ語でナブラと読み、弦楽器の竖琴という意味である。要するに、専門性と一般性が、Tとは違って、強固にぎっしりとつながっている、という意味である。つまり、▽型人間とは、専門と世界のつながりを多様な意味で理解し実践する人間のことである。自分の専門分野は、炭素材料の実用化という意味だけでなく、あらゆることがらとつながっている。その環境保全的な意味、安心・安全との関係、学問の教育・啓発という意味、アナロジカルに他の分野で役に立つという意味、予想外の学問分野や産業や非営利組織の活動につながっているという意味、それから、自らの生活や、家族の幸福、同僚の出世、技術の企業化、国内外の経済・政治・文化との関連などである。これを理解せずして、Tの縦の棒と横の棒がか弱い接点でつながっているだけで満足しては、横の棒は単なる教養である。単なる教養では、縦の棒とはつながらない。つながらない以上は使えない。Tの縦の棒と、横の棒は、あらゆる部分が、あらゆる部分と、適切につながらなければならないのである (Fig. 1 (b))。

3. システムデザイン・マネジメントとは何か？

私が所属する慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科は、2008年にゼロから新設された日本に類例のない大学院である。修士課程と博士課程から成る。

コンセプトは、工学、理学、経済学、経営学、法学、商学、心理学、芸術学、哲学などのディシプリン (学問分野) を超えて様々なシステムをデザインしマネジメントできる人材の育成、すなわち、各自の専門性と、様々なディシプリンの関連性を結びつけられる▽型人間の育成である。

システムデザイン・マネジメント研究科の「デザイン」は、工学的な設計や意匠設計のみならず、政策提言や、地域社会システムやNPOシステムの構想提言や、人生のデザインも含む。すなわち、「大きなビジョンを描く」こと一般とあってよい。つまり、工学の枠内に留まらない。では、ビジネススクールのような専門職大学院なのか、と言われることがあるが、そうではない。専門職大学院は、法曹界を目指すための法科大学院、経営者を目指すための経営学大学院、技術経営をめざすためのMOT (Management of Technology)、というようにまさに専門職を目指すためのものである。しかし、システムデザイン・マネジメント研究科は、「各学生の目指す専門職が何であるかに関わらず、学ぶべき体系をシステムとして捉え、システムの視点から、ものごと (および自分) をデザインしマネジメントできる学生」を育成する大学院であり、何らかの特定の専門職だけを目指すのではないことが特徴である。なお、「マネジメント」は、単に「経営」や「管理」だけを意味するのではない。様々なシステムを運用していくこと一般という意味である。したがって、学生の分布は文理融合型であり、理工系出身者から、社会科学系、人文科学系、芸術系、農業系、体育系まで多様である。年齢層も、20代から60代まで幅広い。出身大学も、早慶、東大、その他国内国公私立大、そして、国外大学と多様である。学生の目指すところも幅広い。IT業界でのシステムデザイン力を身に付けキャリアアップを目指すIT系の学生も多い一方、機械系、建築系などの工学系も多く、教員を目指す教育系も少なくない。NPO、NGO、社会企業、起業などに興味のある、社会貢献系・自己開発系の学生も多い。今よりさらに大きなビジョンを描く力を身に付けたいという経営者、弁護士、コンサルタント、マスコミ関係者など、すでに社会で成功している人たちも少なくない。企業からの派遣組も多い。過半数は社会人である。さらには、大きなビジョンを描く力を身に付けるのみならず、学問として発展させて新しいタイプの学者になりたい、という野心的な博士課程学生も少なくない。それらの複合型も多い。

つまり、専門職大学院でもなく、かといって、従来の理工系大学院のように、「研究を通しての教育」だけを行なうのでもなく、様々な技術システム、社会システム、人間システムをデザインしマネジメントしたい、という志を持った人々

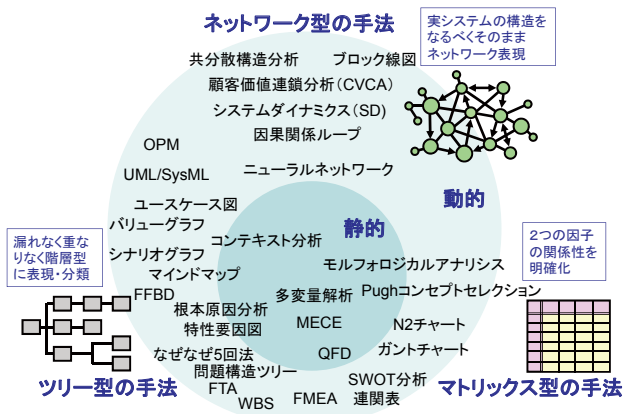


Fig. 2 慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科で教える手法の概要

の集まりなのである。

重要なのは、募集する学生が、「既に何らかの専門性を有する者」である点である。「システムの視点は要素還元的な視点を身に付けた者がそのあとで身に付けるもの」であるべきである。このため、システムデザイン・マネジメント研究科は「既に要素還元思考を身に付けた者が、システムとしてのものの見方を身に付けに来る場」というのが基本的な立場である。もちろん、現実には、両者を身に付けたい若い新卒学生も入学している。

4. 具体的に、どんな教育をすればいいのか？——逆転の発想と超越の発想を！

システムデザイン・マネジメント研究科で教育している内容は多岐にわたる。教える手法を図に示したのがFig. 2である。Fig. 2より明らかなように、教育する手法は、システム工学、情報工学、生産工学、プロジェクトマネジメント、システム思考、ビジネススクールなどで一般に教えられる手法を網羅している。もちろん、手法だけを教えるのではなく、その背後にあるフィロソフィー、方法論、フレームワークも教えるのであるが、これらの詳細を説明するには紙面が足りない。ここではそのエッセンスを述べよう。要するに何を教授しているかということ、「逆転の発想と超越の発想を」である。

たとえば、私の専門の一つである触覚を例にとると、「サービスロボットの手に触覚を持たせたいが、コストと技術レベルから考えて具現化が難しい」という問題があったとしよう。この場合、技術開発により問題の打開を図ろうとするのが一般的な要素還元論的なやり方であろう。もちろん、基本として、それも重要である。これに対し、「逆転の発想」の例は、「触覚を持たせる対象は、実はロボットの足でもいいのではないか」「視覚で代用できるのではないか」「触覚なしで制御できないのか」など、問題の前提の一部を根本的に見直すことである。さらに、「超越の発想」の例は、「そもそも本当に

ロボットでサービスを行うことが必要か」「そもそもサービスを行なうことが必要か」「そもそも当該事業体は技術開発を行って製品化するというメーカーというあり方を続けるべきか」のように、その問いの全体そのものを見直すことである。技術者が与えられた役割だけをこなすのが一般的なありかたであるのに対し、そのプロジェクトに疑問を呈する立場が「逆転の発想」、その事業体のあり方や社会のあり方自体に疑問を呈する立場が「超越の発想」である。平社員が、課長の如くに考えること（逆転の発想）、社長や市民のごとくに考えること（超越の発想）である。言い換えれば、“Think globally and act locally”（着眼大局、着手小局）、すなわち、▽型人間である。システムデザイン・マネジメント研究科では、このような自由自在な発想法の教育を行い、スケールの大きな人材の育成を志している。このように、俯瞰的な視点と精密な視点を併せ持つことによってこそ1章で述べたような現代社会が直面する課題を解決することができると考えている。

5. ヒューマン・ラボにおける研究——人間中心デザインから人間中心主義の超越まで

これまで研究科の紹介をしてきたが、以下では、私が主催するヒューマンシステムデザインラボラトリ（通称ヒューマン・ラボ）の研究の概要を述べよう。

2008年度にシステムデザイン・マネジメント研究科が発足するまでは、私は慶應義塾大学理工学部機械工学科に所属し、ロボティクス、触覚、超音波モータなどの工学的研究を行っていた。同時に、心の哲学に関する本の執筆と、技術者倫理教育を行っていた。つまり、工学と哲学・倫理という両極端の教育・研究を行っていた。これは、いくら工学が工業の発展に寄与しようとも、「そもそも工学・工業は何をなすべきか?」「これまで工学・工業は世界の発展に本当に貢献してきたのか?」といった問いに対しては無力であるから、「何をなすべきか」を対象とする倫理学や、「そもそも私とは何か」を対象とする哲学を、並行して探究することが必要であると感じていたからである。

一方、2008年度に移籍したシステムデザイン・マネジメント研究科は、工学、哲学、倫理学といった学問の壁を取り払って、具体的な工学的・工業的問いと、根源的な哲学的・倫理的問いをつなぎ合わせて考えることができる場である。いや、そのような新たなアプローチを行える唯一の場である。このため、近年は、私の研究領域を拡大し（両極端の間を埋め）、以下のような教育・研究を行っている。

5.1. コミュニティ・組織・ビジネスシステムのデザイン

協調的環境配慮行動モデル、サステナブルなNPOのあり方、公共団体の地域間連携方法、新たな地域連携農業システムの構造、企業体の理念浸透施策、経営者・従業員・社会の

利益と幸福の共有方法、全体整合を目指す新たなマーケティング手法の開発など、よりよい人間社会のあり方に関する様々な研究を行なっている。学問基盤は、システム工学、社会心理学、社会学など。

5.2. ヒューマン・マシンインタフェースシステムのデザイン

ロボティクスと触覚技術をベースに、コミュニケーションロボットのデザイン、アクティブタッチパネルのデザイン、コンシューマプロダクトの触覚デザイン、バリアフリーシステムのデザインなど、様々なヒューマン・マシンインタフェースシステムのデザインを行なっている。学問基盤は理工学、心理学、芸術学、倫理学など。

5.3. 教育・学習・成長システムのデザイン

マルチディシプリナリ (multidisciplinary, 学問分野横断的) な教育やコンサルティングをシステムック (systemic) 且つシステムティック (systematic) に行なうにはいかによければよいか? というシステムデザイン・マネジメント学の研究を行なっている。学問基盤は教育工学、システム工学、システム科学、システム哲学、システム思考。

5.4. 自己システムのデザイン

「自己」「意識」「クオリア」とは何か⁽³⁾。「幸福」「ハッピー」「欲求」「面白さ」「協生」「至福」「悟り」とは何か⁽⁴⁾。「教育」「学習」「成長」「人生」とは何か⁽⁵⁾。これらの第一人称的 (且つ第三人称的) な課題に、学問分野横断的に取り組んでいる。学問基盤はシステムデザイン・マネジメント学、心の哲学、倫理学、社会学、心理学、脳科学など。

5.5. これから行ないたい研究分野

南北問題、環境問題、安心・安全の問題など、人類が直面するグローバルイシューを解決するために、国際平和システムのデザイン、文明・文化システムのデザイン、国際政治システムのデザイン、宗教共生システムのデザイン、アートシステム (音楽、美術、文芸、建築、工芸など) のデザインなど、あらゆる課題を相互に関連するシステムの問題と捉え、俯瞰的な視点から研究していきたいと考えている。

これらのうち、最近最も力を入れている研究の一つが「幸福学」の研究である。あらゆるシステムのデザインは、大局的にみると、人々の幸福に資するためにあるべきである。にもかかわらず、システムデザインと幸福の関係はこれまで十分に考慮されていなかった。それでは、現代という困難な時代に何をなすべきかという本質的問いに答えることはできない。このため、そのギャップを埋めるべく、システムのデザインに資する幸福学の体系化と、幸福に資するシステムのデザインに関する研究を鋭意行っている。

皆さんは、どのような人が幸せだとお考えであろうか? 本稿では、我々が網羅的に調査した結果、幸福に関係があるといわれている因子を書き出してみよう (Table 1)。ただし、幸福と Table 1 の諸量の間に関連があることが心理学的に認められているということであって、必ず誰にとっても比例するという意味ではない。Table 1 が、皆様が幸福について考える際の何らかのヒントになるならば幸いです。

Table 1 幸福研究事例のまとめ⁽⁴⁾

| | |
|---|---|
| 【年齢】 | <ul style="list-style-type: none"> ●年齢と SWB (Subjective Well-Being, 主観的幸福) との間には有意な相関はない [Larson, 1978] [前田他, 1979] ●若者より高齢者の方が認知的な満足度は高い [Diener, 1984] ●老年、幼年は中年より幸福 [林, 2003] |
| 【性別】 | <ul style="list-style-type: none"> ●幸福と性別に有意な相関は見られない [Cooper, Okumura & Mcnell, 1995] [Diener&Lucas, 1999] [Larson, 1978] ●男性よりも女性の方が幸福だが差は縮小傾向にある [林, 2003] |
| 【身体的健康】 | <ul style="list-style-type: none"> ●性差は SWB に大きな影響を及ぼす [Edwards&Klemmack, 1973] [Larson, 1978] |
| 【脳計測】 | <ul style="list-style-type: none"> ●幸福観の高い人は、左脳前頭葉部の活動が右脳前頭葉部の活動よりも活発 [Ryff, 1989] ●チベットの仏教僧は、左脳前頭葉部の活動が右脳前頭葉部の活動よりも活発 ●瞑想の訓練を行っている人は、行っていない人よりも、左脳前頭葉部の活動が活発 [Davidson, 2003] |
| 【気質】 | <ul style="list-style-type: none"> ●SWB の基本水準は遺伝的な気質によって先天的に決定されている [Headey&Wearing, 1989] ●人格特性や SWB の 50% 程度は遺伝により説明できる。 [Lykken&Tellegen, 1996] |
| 【社交性・外向性】 | <ul style="list-style-type: none"> ●多くの研究で「外向的な人ほど幸福」な傾向が確認されている [Lucas et al, 2001] |
| 【楽観主義】 | <ul style="list-style-type: none"> ●幸福度の高い人はよい出来事を思い出しやすく、出来事をポジティブに解釈する傾向がある [Seidlitz&Diener, 1993] |
| 【満喫】 | <ul style="list-style-type: none"> ●日常生活の平凡な経験も「満喫する」態度を持つと満足度が高まる [Bryant&Veroff, 2007] |
| 【自尊心 (pride, self esteem)】 | <ul style="list-style-type: none"> ●人は、良い事が起きると自分の手柄に、悪い事が起きると他人のせいにする傾向を持つ = 「ポジティブ幻想」 [Tayler&Brown, 1988] ●米国では、「対人関係の満足度」と「自尊心」との相関が強いが、日本では弱い [Uchida et al, 2001] |
| 【神経症傾向】 | <ul style="list-style-type: none"> ●神経症傾向の強い人は幸福感・人生の満足度が低い [DeNeve & Cooper, 1998][Heller et al, 2004] |
| 【自己統制感 (perceived control)】 | <ul style="list-style-type: none"> ●統制感の高い人は低所得でもあまり不幸を感じない [Lachman & Weaver, 1989] |
| 【自己目的 (autotelic)】 | <ul style="list-style-type: none"> ●オートテリック (自己目的) な人ほどフローを体験しやすい [Asakawa, 2004] |
| 【フロー (flow)】 (内発的に動機付けられた、時間感覚を失うほどの高い集中力、楽しさ、没入感覚) | <ul style="list-style-type: none"> ●日本人は高い challenge にフローを生起する傾向がある一方、中国人、米国人は高い遂行能力をもっているときにフローを経験しやすい [Asakawa, 2004] |
| 【調和】 | <ul style="list-style-type: none"> ●東洋の集団主義文化においては、満足度と強い相関があるのは、「自尊心」よりも「調和」 [Kwan, Bond, and Singelis, 1997] |

【感謝、親切心 (gratitude, kindness)】

- 感謝 (gratitude) が物欲を低下させ、幸福を高める効果をもたらす [Polak&McCullough, 2006]
- 親切心 (kindness) に基づき自分が行った行為を日々カウントすることによって、幸福度は高まる [Otake, Fredrickson, et al, 2006]

【目標達成】

- 目標達成は幸福観に影響 [Brunstein et al, 1998]
- 日常的目標と人生の目標の一貫性は人生の満足に影響 [King et al, 1998]

【教育】

- 教育と SWB の有意な相関は見出せない [前田他, 1979]
- 成績と幸福観には正の相関がある (ただし、非常に幸せな人は少し成績が下がる) [Oishi&Diener, 2007]
- 教育水準の高さは幸福度に直接つながらないが、人生によりよく対処できる可能性はある [林, 2003]

【記憶力】

- ポジティブな気分になると記憶力は落ちる [Storbeck&Clore, 2005]
- ポジティブな気分は「関係性への着目」を促す一方、ネガティブな気分は「個別要素への着目」を促す傾向がある [Storbeck&Clore, 2005]

【抽象度】

- 幸福観について、「抽象的な視点を促す群 (学校の成績はおおざっぱにいいか悪いか)」と「はっきりとした基準を促す群 (学校の成績の平均は何コマ何点か)」を比較すると、前者の方が幸福感が高い [Updegraff&Suh, 2007]
- ものを購入する際に「あらゆる情報を仕入れ細かく吟味派」と「ある程度適当でOK派」を比較すると、前者の方が鬱傾向が高く、後者の方が幸福感が高い [Updegraff&Suh, 2007]

【信仰心】

- (キリスト教的) 信仰心が高い人はより高い SWB を感じている [Okun&Stock, 1978] 他
- (仏教的) 座禅に至る悟りの境地は「心の絶対の平和であり、エデンの園を行くがごときに人世を楽しませること」 [鈴木大拙, 1940]

【所得】

- 年取が低いときは年取と幸福度は比例するが、年取が約 7 万 5 千ドルを超えると幸福度は頭打ちになる [Kahneman, 2010]
- 戦後日本の GDP は 6 倍に増大したにもかかわらず国民の満足度は横ばい

【婚姻関係】

- 既婚者のほうが SWB が高い傾向があるが、近年その差は小さくなる傾向にある [Diener&Lucas, 1999]

【対人関係】

- 家族・友人関係の満足度と SWB の相関：集団主義社会<個人主義社会 [Diener&Diener, 1995]
- 米国では、「対人関係の満足度」と「自尊心」との相関が強いが、日本では弱い [Uchida et al, 2001]

【社会的比較 (social comparison)】

- 人は自分と関わりのある他の人々との比較によって、自分の SWB を判断してしまう傾向がある [Frey&Stutzer, 2006]
- 例 1) NY の金融街に住む証券アナリストの A 氏は、自分の収入が他よりも少なかったために自分は不幸だと感じていたという。ちなみに A 氏の年収は百万ドルだったという。
- 例 2) 日本に住む新入社員の B 氏は、自分の収入が他よりも少なかったために自分は不幸だと感じていたという。ちなみに B 氏の年収は 150 万円だったという。
- 失業者の幸福度は低い、同じような失業者が周囲にたくさんいる場合はその不幸を痛切には感じない [Frey&Stutzer, 2006]

【政治体制など】

- 直接民主制 (政治プロセスへの参加) は人々の生活満足度を高める [Frey&Stutzer, 2006]
- 冷戦後、情勢不安のあったロシアやイラクの侵攻危機下にあったクウェートでは満足度は低かった [Veenhoven, 2001]

【文化的背景・社会的背景】

- アジア系は将来の目標達成につながる活動に幸福を抱き、欧米系はより利他的なものに幸福を感じる傾向がある [Asakawa&Csikszentmihalyi, 2006]

- アジア系はひとつのタスクに執着する傾向がある一方、欧米系は切り替えるのが上手 [Oishi&Diener, 2001]
- 失業はその所得損失以上に幸福度を低下させる (所得の効果は 1/3 以下) [Frey&Stutzer, 2006]

6. おわりに

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科での教育と、私の主催するヒューマン・ラボでの研究を例に、これからの教育・研究のあり方について考えを述べた。様々なことを述べたので散文的になった面もあるが、読んでくださった方に、閉塞感と不確実の時代を打開するための知と行動と教育のあり方について、それぞれ何かを感じていただけたなら幸いに思う。

参考文献

- (1) 宮台真司, 日本の難点, 幻冬舎新書, 2009 年
- (2) 前野隆司, 思考脳の作り方—仕事と人生を革新する四つの思考法, 角川新書, 2010 年
- (3) 前野隆司, 脳はなぜ「心」を作ったのか—「私」の謎を解く受動意識仮説, ちくま文庫, 2010 年
- (4) 松本直仁, 慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科修士論文「主観的幸福における社会的なつながりの価値の明確化—対人関係ネットワーク構造モデルによる主観的幸福の規定因分析—」, 2010 年
- (5) 神武直彦, 前野隆司, 西村秀和, 狼嘉彰, 学問分野を超えた「システムデザイン・マネジメント学」の大学院教育の構築—大規模・複雑システムの構築と運用をリードする人材の育成を目指して—, シンセシオロジー—構成学, Vol. 3, No. 2, 2010 年, pp. 112-126

著者



前野 隆司

(まえの たかし)

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授。

システムデザイン・マネジメント学の教育・研究に従事。